

A black and white speckled rabbit is lying on a gravelly ground covered with pine needles. The rabbit is facing right and has its ears down. The background is a mix of grey gravel and brown pine needles, with some sunlight filtering through.

うさぎちの夏

まつむら たけひろ

おにいちゃん

なんだか最近、暑い日が続いてる。

前にもこんな日がずーっと続いたことがあるような気がするけど、どうだったっけ。あったような。なかったような。

朝ですよ。

朝ってというのは、残念な気持ちから始まったりする。さっきまで、山ほどのふかふか牧草の上でゴロンゴロンしていたはずなのに、気が付いたらいつもの家の中だ。

あれっ？

なんで？

ちえっ。

僕が何日かけても食べきれないようなたっぷりの牧草は、どこに行ってしまったの？

家の中には、ちんまりと、一日もあれば食べちゃうくらいの牧草。

とりあえず食べる。もぐもぐ。

「おー、うさきち。おはよー」

おにいちゃんが、人間用の家の中から出てきた。頭が黄色い。

おにいちゃんの頭は、毎朝黄色くなる。黄色い頭でどこかに行く。

暑くて暑くて動けない時間が過ぎると、黄色い頭のおにいちゃんは帰ってくる。帰ってくると、いつのまにか頭が元に戻ってる。

たまに頭が黄色くない朝があって、その日のおにいちゃんはどこにも行かない。

だから、今日のおにいちゃんはどこかに行くのだ。

どこに行くのかは知らない。

おにいちゃんは、僕に「おはよう」と言うと、家の前でお友だちを待つ。お友だちの頭も黄色くて、みんなどこかに行くらしい。

みんなで一緒に行くんだから、きっと牧草がたっぷりあって、すっごく広くって、いっぱい走り回れるステキなところに違いないのだ。

いいなあ。

だけど、時々おにいちゃんは、行きたくなさそうな顔をすることがある。
たぶん、その日は牧草が少なかったりするんだろう。

「オオカマキリ発見！」

おにいちゃんが何かを見つけた。緑色の虫を持ってる。

おにいちゃんは虫が好きだ。いろいろな虫を持って帰ってきて、小さなおうちに入れている。

おにいちゃんは、僕より虫が好きなんだろうなあって思う。

おにいちゃんは、僕のことをあんまり撫でてくれない。

おにいちゃんは、僕のお家に牧草を入れてくれない。

おにいちゃんは、僕に「おはよう」と「ただいま」しか言ってくれない。

ちょっと、さみしいな。

おにいちゃんが、あの緑の虫を小さなおうちに入れている。

そしたら、家の前に、おにいちゃんのお友だちがやってきた。

「おーい、おはよー」

「あ、おはよー！」

おにいちゃんは虫のおうちを置くと、お友だちのほうに走っていく。

「あ」

おにいちゃんが止まった。

くるっと、僕のほうを向いた。

ガチャガチャと、僕の家のおふたを開ける。

「うさきちまたねー」

撫でられた。

行っちゃった。

ふんだ。

おにいちゃんは、時々思い出したように、僕の頭を撫でてくれる。

だから僕は、おにいちゃんが好き。

ちびこちゃん

「うさきちー！」

来たあー！

ちびこちゃんは小さな女の子。おにいちゃんの妹。
おにいちゃんは、僕をあんまりかまってくれないけれど、ちびこちゃんはその逆。

「までーっ！」

僕が外に出してもらっていると、いつもいつも追いかけてくる。
そしてわしわし撫でられるのだ。
うれしいんだけど、ちょっとしつこい。

だから、ちびこちゃんが来たら車の下に隠れちゃう。



「あー、うさきちまた隠れたあ」

ごめんねちびこちゃん。

こうすると、ちびこちゃんは飽きて、どこかに行ってしまうのだ。

それを待つ作戦！

ほらもうどこかに行った。

ふいふいーん。

車の下は涼しくて好き。

ちびこちゃんの手は生ぬるくって、撫でられるのはうれしいんだけど、暑くて暑くて。

ん？

「えへへへーっ！」

ちびこちゃんが車の下を覗いてる....

まあいいや。

僕は涼しく伸び伸び。

ママさん

「ちびこー！」

「はーい」

ママさんの声がして、ちびこちゃんがいなくなった。

僕の家は、いつもママさんがきれいにしてくれる。

少しずつ、うんちとおしっこの臭いがしてくるんだけど、ママさんがきれいにしてくれたあとの僕の家は、ママさんの匂いがいっぱいになる。

でもね。

うれしいんだけど、やっぱり困る。

僕は車の下から出てきて、家に戻ってみる。

「お帰りうさきち。きれいになったよー」

ママさんの足元をするっと通りすぎて、家に入る。

やっぱりやっぱり。

僕の匂いがどこにもない！

すりすり。すりすり。

トイレにあごをこすりつけ。

「またやってるの？」

ママさんとちびこちゃんが見ているけど、それどころじゃない。

ここは僕の家。僕の匂いがしないと気持ち悪くて気持ち悪くて。

あちこちすりすり。

木の台や、お水の出るところや、かじると楽しいおもちゃもすりすり。

ママさんは、牧草もお水もくれるし、僕の家をきれいにしてくれる人。この家で、僕が一番好きな人。
でも、僕の匂いを消しちゃうのは困っちゃう。

すりすり。

パパさん

お外が暗くなってきた。

ふっふっふ。

ここからが楽しい時間なんだよねー。

暑い時間が終わって、家の人たちはみんな寝ちゃう。

僕だけの時間。

ふっふっふ。

外に出られたら一番楽しいんだけどなー。

「ただいまー」

お。

パパさんの声がする。

「うさきちただいま！」

僕は、パパさんが帰ってくるところしか見たことがない。

人間用の家の中から出てくるのは、時々。

「ただいまー」

僕の家のお戸を開けて、おでこをくりくり撫でてくれる。

パパさんは、僕のおでこを撫でるのが好きみたい。

僕も、おでこを撫でてもらうのが好き。

飽きもしないで、パパさんはしばらく僕を撫でてくれる。

「じゃあね、おやすみ」

パパさんが家の中に入って行くよ。

パパさんは、お日さまの出ている時間は家にいない。

どこで何をしているのかは、謎。

うさきちの夏

<http://p.booklog.jp/book/55641>

著者：まつむら たけひろ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tardyon/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/55641>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/55641>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ